奥野信太郎随想全集 四

奥野信太郎隨想全集四

江苏工业学院图书馆
藏书章

文学みちしるべ

編集委員
佐藤　朔
戸板康二
村松　暎

福武書店

奥野信太郎随想全集（全六巻 別巻一）
4　文学みちしるべ
定価二八〇〇円
昭和五十九年九月十五日初版印刷
昭和五十九年九月二十五日初版発行
著者　奥野信太郎
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
〒一〇二　東京都千代田区九段南二―三―二八
電話　東京(〇三)二三〇―二一三一(代)
振替口座　東京二―八七三七二
印刷＝精興社／製本＝小泉製本
本文用紙＝三菱製紙

©1984

シリーズコード　ISBN 4-8288-1125-7　C 0395
第4巻コード　ISBN 4-8288-1108-7　C 0395　¥2800 E
NDC 914 196 284 p

文学みちしるべ

奥野信太郎随想全集 4

目次

I

北平時代の洪北江……7
中国劇随想
巫風と歌舞……31
侏儒の系譜……54
武技のこころ……70
人工楽園の薔薇——乱世と中国人の心——……83
魯迅の文章について——『朝花夕拾』を中心として——……94
仙人と仙薬……107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『水滸伝』と『金瓶梅』……122
『金瓶梅』覚書……125
『遊仙窟』訓読の伝説について……132
中国の鬼談……142
中国の幽霊……152
中国艶情文学考……157
花沈む小径——唐代の女詩人たち——……166
好色文学とは……177
李賀雑考……188

II

円朝・鏡花の世界……203
『牡丹灯籠』……209

鷗外と中国文学……221
荷風と中国文学……235
永井荷風における好色趣味……253
佐藤春夫訳『車塵集』序……262
ありし日の紀行文学——花袋・蘆花を中心に——……269
解説　村松暎……277
出典一覧……281

装幀　井上太郎

I

北平時代の洪北江

北平の町を歩いているとき、なによりもわたくしに親しく感じられることは、およそこの町のもっている表情が、五十年以前も、或は百年以前も、やはり今日のそれと、それほど激しい変りかたをしていなかったろうという心安らかさが、ごく自然に胸に流れこんでくれることである。なるほどその昔は、なだらかな流れに、柳のかげが樹深く美しいいろを溶かしこんでいたところも、今では索漠たる暗渠となってしまったような、また古い貴族の邸宅がとりはらわれて、そこがいつしか殺風景極る役所に変ってしまったような、そういう変遷は随所にみられるけれども、そのためにこの町の典雅な精神が、かたなしになってしまったという、そんな悲痛な気もちを少しももつことなく、あらゆる変遷をのりこえて、まず北平の表情を、嘉慶年間のそれであると考えることも、乾隆年間のそれであると考えることも、極めて自由なことが、とりわけこの町への親しさを深くする。乾嘉の詩人洪北江が、嘗てこの都城に住んでいたときに、その詩と生活が、北平の空をわたる風や、

月のひかりや、四季それぞれの花のいろや、そういうものとどんな調和を示していたろうか、ふとそんなことを考えながら、わたくしは、自分の文学地図の一隅の地域として、打磨廠や琉璃廠の通りを、しばしば彷徨するのであった。

洪北江がはじめて北平の地を踏んだのは、乾隆四十四年、ちょうど三十四歳の五月であった。彼は詩友黄景仁の寓に、一時旅装を解いたのである。当時黄景仁は、城南法源寺の西斎で、病を養いつつ、詩の精進を続けていた。法源寺は広安門大街の南、門楼胡同のまた南にある巨刹で、丁香花の季節には、その花の美しさをもって、殊に名のある浄域である。土牆に沿うて中門に至るまで、その静かな路の幾曲り、どこか法隆寺附近の温藉な風景を想いおこさせる。年譜によると、間もなく黄寓を去って、孫溶延の家にその居を定めたらしい。孫溶延は『四庫全書』の総校であったから、寄寓した洪北江は、その為事の手伝をして、経済的な援助を受けることとなったのである。孫宅は前門外打磨廠にあった。打磨廠は前門から崇文門まで続く、かなり長い通りであって、もし正陽橋畔を左折東進すれば路南の刃物屋の異様な店飾りと、旅店の多いのにちょっと驚かされる。やや曲折してはいるが、大体に於て真直に東西に通じている通りであるといってよかろう。もし崇文門外を右折西進すれば、正陽橋畔を左折東進するより、はるかにもの静かな町のおちつきを感ずるであろう。つまりこの通りは、崇文門外の方から進めば次第に賑やかになり、前門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

外の方から進めば次第に寂しくなるといえば、早解りがする。路北に二酉堂と招牌を掲げた一書肆がある。但し鬻ぐところの書籍は、粗悪な習字手本や唱本の類であって、往昔琉璃廠にその名を轟かした書肆二酉堂でないことは明らかである。このあたりは古風な、おちついた屋並が建ち続いている。洪北江が寄寓した孫宅が、打磨廠のどのあたりかは分明しないが、もし想像するならば、あの刃物屋や旅店などの雑踏に近い方よりは、少くとも二酉堂に近い方の、おちついた場所であったのではあるまいか。恐らく乾嘉の昔から、正陽橋寄りは賑やかであり、それから遠のくほど静かになっていったことには、変りはなかったろうと思われるからである。

孫宅にあって、洪北江の営んだ生活は、正に奮闘努力の一語に尽きるといってよい。孫溶延から得る報酬一年二百金のうち、その半を割いて、これもやはり当時上京していた仲弟の生活費にあて、残る半は郷里に送金していた。従って彼自身の生活そのものは、困苦欠乏、その極に達していたことであった。殊に仲弟が病を得て、不幸、喀血してからは、衣類を典してこれを助けるの余儀なきに至った。折しも乾隆帝南巡後、諸臣に命じて賦を献らせることがあった。偶々尚書梁国治のために、頌賦十八章の代作をしたことが評判となって、代稿の依頼が少なからずあり、二月から七月までの短期間に、執筆五六十篇、得るところも四百両を超えたので、弟にも十分な療養を与え、負債も尽く完済すること

ができた。しかも一方、日に八冊ずつの校合と、数十個条の精緻な考証をやっていたというから、その精力には全く敬服せざるを得ない。

この孫宅時代の北平生活は、『巻施閣集』巻一・巻二の諸作にこれを窺うことができる。この間彼はしばしば城南天橋に赴いて痛飲の快をほしいままにしている。今でこそ天橋は、塵埃裡の雑踏で、所謂盗賊市場などと称せられているが、その頃は清流の水涼しく、悠然として酒盃を銜むにふさわしい風雅の地であったことは、「青郊　三里の月、紅燭　一杯の春」とか、「門を出でては万古の愁を逐わず、聊か高閣に上って吟眸を開く」とかいう詩句によって察せられる。さらに「壇雲窗に入りて暗く、山鳥楼に上りて馴る」或は、「咫尺す郊壇の外、春雲すべて竜に似たり」また或は、「客に伴って、時に春禽のきたるあり、城門楼上春陽満つ」等の詩句から、天壇の森の野鳥が、しばしば酒楼の窓を訪れ、永定門にさす春の光の滴りと、柔かい季節の雲のゆれ動きとが、酒味の好を加えたことも想像に難くない。しかしまた、病漸く篤きに赴きつつあった詩友黄生を、法源寺に訪れて、「故人、病を抱いて西斎におる。痩影亭々日に三たび至る」といい、「今年花盛にして、病また盛なり」といっている詩句に接すると、凄愴の気は特に甚だしい。法源寺の花というのは、今でこそ丁香花であるが、その頃は海棠花が美しかった。そして今は牡丹をもって鳴る崇郊寺が、むしろ丁香花の名どころとして聞えていた。このことも北江の詩によって

知られる事実であるが、謳われる花の身の上に、こうした変遷のあることは、まことに興深いことである。法源寺を訪れて、黄景仁のいた西斎というのは、どの辺のことであろうかなどと、臆測を逞しくするときに、花も変り、人も変ったという感慨が、一入哀愁をそそるかに胸を衝く。

第一次の淹留は、約二十三個月続いた。孫宅は打磨廠から、これもすぐ南の小巷賈家胡同に移ったが、そのとき洪北江も共に移居した。従って、彼は孫宅との因縁は極めて深いものがあった。この間、江蘇陽湖生れの彼の郷音も、聊か北京音に習熟したことではあろうが、これとて、やはり今と同じく、促音の多い彼の言葉を聞いて、京油子の誰彼は、〃南方人〃なる呼称をもって対したにちがいない。

彼は正に〃南方人〃である。そして北平に於ける洪北江の詩を通じて、最もわたくしを感動せしめる一事こそ、この南方人である彼が、常住坐臥、故郷の人を思い、郷土の風物を恋うる一念に徹していたことである。少くとも北平に於ける洪北江を、一言にして尽すならば、それは懐郷の詩人としての姿であろう。

試みに開巻第一『夢に外家の南楼に入り、覚めて後、感あり、内弟阿魁・阿愚に寄する四首』を誦するならば、思半に過ぎるものがあることと思う。

乾隆四十六年四月、洪北江は第一次の北平生活から離れて、西安に向った。その際、平

生弟のごとく親んでいた黄景仁と分れることは、最も忍び得ざるところであった。その留別の詩句に「才人命の薄きこと君のごときは少なし」或は、「君のいまだ死せざるに重ねて相見んことを期す」等の語を見ることは、その心情の悲痛の深切を覚えて、ほとんど卒読にたえざるものがある。翌年春、黄生は西安に北江を訪い、開元寺に寓して三月の日子を過した。こうして留別の詩意に沿うたのであったが、さらにその翌年、即ち乾隆四十八年五月、再起の不能を自覚した黄景仁は、病勢を冒して北平を出発、太行山を越え、雁門に出で安邑まで辿りついたが、ついにその地で逝世したのであった。洪北江は西安から安邑まで四昼夜、騎乗の旅を続けて馳けつけた。

彼に後事を託した遺書のほか、数枚の名刺と帽子が一つ、遺品はただこれだけであった。寂然たる死後である。水のほとりに低き塚をしつらえ、その好める竹を植えんかなと歌い出た洪北江の心には、亡友を憶う悲しみ以外、なにものもなかった。この同じ年、はからずも黄鶴楼に登臨して、その壁間に黄生の筆蹟をみたとき、また太白楼を望見して、嘗て顧文子・黄景仁の二亡友とここに遊んだことを追憶したとき、彼は慟哭をそのまま詩に写したのである。「君見ずや偕遊の少年尽く客死せるを」の一句は、蓋し千万の言にまさって衷情を吐露したものといってよかろう。

第二次・第三次・第四次の北平生活は、いずれも短期間であった。これはいずれも礼部

の会試に応ずるための上京であり、しかも考試の結果は、悉く不幸、選に中らなかった。第二次即ち乾隆四十九年は二月から四月までの滞在で、泡子河観音寺の繆汝和の居に寓した。第三次即ち五十二年は正月から五月まで、また第四次即ち五十四年は二月から五月まで、これはいずれも最も親しい詩友孫星衍の居に寓した。但し五十二年には、孫星衍は宣外縄匠胡同に住んでいたが、五十四年に上京した際には、琉璃廠に移り住んでいた。縄匠胡同は広安門大街の南、現在は丞相胡同の名をもって呼ばれている、南北に走る巷路であり、琉璃廠は広安門大街を隔ててその東北にあたっている。菜市口の近所から南折して、一たび丞相胡同に入れば、間もなく物売る店が姿を消して、もの静かな邸続きの町となる。やはりこのあたりの常として、中州新館や太平会館など、ところどころに会館の門がみえ、胡同の中程は至って路幅も広く、大きな槐樹が枝をはって茂みをつくっているあたり、ときどき小販の車が荷をとどめて、ささやかな食べものや飲みものなどの商売をしている。西に平行する北半截・南半截胡同とは、さらに小巷が東西にわたってこれを接続する。琉璃廠はここから十分とはかからない距離にあるが、東西にわたる比較的広い地域であるから、孫星衍が居を構えていたのが、多分この辺であったろうという空想をほしいままにすることには、やや不自由であるけれども、今は書肆の立並ぶ表通りを、大きな扇子で日を遮りながら、ゆっくり歩いてくる風雅な人などに出会うと、乾隆の昔も、やはり

孫星衍や洪北江が、こういう姿で、この通りを静かに歩いていたのではあるまいかなどと、ふと考えてみたりする。

第五次の出京は、乾隆五十五年の二月末であった。それから五十七年の九月まで、三十一個月間の北平生活は、洪北江の生涯中、最も油ののりきった時代であった。当時崇文門外三条胡同に仲弟が住んでいたので、彼はこの弟と同居することにした。三月の礼部の会試の結果、第一甲第二名というすばらしい成績で、永年孜々として倦むことなく勤勉であった労苦が、はじめてここに実を結んだのである。時齢四十五歳、翰林院編修を授けられ、国史館纂修官に任ぜられた。仲弟の家のあった崇文門外の三条胡同は、崇文門を出て南進すること約一丁、三番目の横丁を左折すれば、長々と東西に続く通りが、即ちこれである。

つい近くの花児市の賑わいから、ほんの少し離れているだけで、いわゆる下町の大通りから入った裏通りの静けさに恵まれた場所で、読書人が清貧を楽しみつつ、隠れ住むには適当なところである。その年の秋、弟と共に三里河清化寺街の一宅に移り住んだ。清化寺街は崇文門外大街を南に下って、右折したところ、有名な薬王廟の裏に続く胡同である。

この住居は給事査瑩の旧宅で、竹木の繁茂した、雅人の居としては申分のない住宅であった。後年八角琉璃井に住んだ時代を除いては、彼が北平に於て最も久しい期間、住ん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com